下瀬川 陽
作新学院大学人間文化学部
講師

# 無作為抽出 ウェブ調査の挑戦

杉野 勇・平沢和司 著

法律文化社
2024年
A5判, 210頁
3,600円+税

本書は調査実践に役立つ洞察と方法論を惜しみなく提供する。登場する5つの調査データは, それぞれが比較可能な対応をもつよう精巧に設計されており, その調査デザイン自体が優れた手本となる。

第1章では確率標本におけるウェブ回答と郵送回答との比較がなされる。そこから導き出される多くの知見のなかでも, 同時選択の場合にはモード選択に属性による違いが出るものの, モードの提示順と督促タイミングを工夫すればウェブ回答比率を向上させられる可能性が示された点は, 後続の調査設計にとって重要なヒントになる。第2章では確率 - 非確率標本間で回答傾向の比較がなされる。単変量の分布のみならず, 変数同士の連関における違いも検討され, 非確率標本に平均的にみられる“ズレ”だけではなく, 特定の層における確率標本からの具体的な乖離が指摘される。さらに, 第3章のセンシティブ項目経験率を推定するリスト実験や, 第5章のワーディングの効果を検討するサーベイ実験など, 対象者のランダム割付が容易であるというウェブ法の利点を活かした具体的な実例を提供する。

第4〜6章には, 調査テーマである多文化共生にフォーカスした成果が収録されている。意識研究としての評価は評者の力量ではかなわないが, 専門外の読者にとっても刺激的で興味深い内容である。第4章ではオリンピック開催についての意識が丁寧に読み解かれ, 著者自身も述べるように時代の記録としても価値が高い。第5章では排外意識が取り上げられ, 質問に具体的な国名を伴う場合には, 微妙な意識の違いが見られることが明らかにされる。第6章ではイデオロギーに焦点があてられ, 「革新的」「リベラル」という言葉がもつ意味の世代間での違いや, 「保守」も含めた相対的位置が描き出される。

綿密に設計された調査データの丹念な比較が魅力の手堅い一冊であるものの, 一方で, もう少し知りたい点もある。たとえば, 後半の実証分析における非確率パネルの利用について, 第2章の内容を踏まえた言及がもっとあっても良かったのではないか（注では触れられている）。非確率パネルの利用は結果に対していかなる影響を与えたのか, それをどう評価したのかなどがより掘り下げられていれば, 「確率標本を使用することの重要性」(p.170) をさらに強調できたかもしれない。

また, 調査テーマの軸のひとつとされているICT利用やメディア接触についての分析や, Satisficeについての検討が第2・3章の一部分に留まっている点も気になった。特に後者はウェブモニターを用いることの問題点としてしばしば挙げられるが, 理屈としてはどのモードでも起こり得る。本書のように確率標本との比較が可能なデザインでは, 問いの内容・形式や回答者属性, 回答デバイスなどの影響をさらに追究できたように思われる。目新しい発見はなくとも, 既存の知見をテストしうる重要な分析が期待できたのではないか。

ただし, 以上の点は本書の意義を減じるものではない。むしろ, さらなる議論や研究への刺激を与える貴重なリソースであるとともに, 学術研究における社会調査について学ぶところの多い一冊である。なお本書の本質的な部分とは離れるが, どの章においても, クロス集計や相関分析といった初学者にも馴染みやすいシンプルな方法を用いながら, 社会の実像を豊かに描き出している点が印象的である。これから計量的な方法を使ってみようと考える人々にも参照してもらいたい。